

最近、舛添要一・東京都知事の出張や週末の公用車の利用についての指摘が出ています。「良いか悪いか」という論議は避けませんが、やはり都民が知事に求める姿勢との「ずれ」が存在するため、問題になってきているのではないかと考えます。医療にも同じようにいろいろなたとえに「ずれ」があり、それが目立つようになってきています。

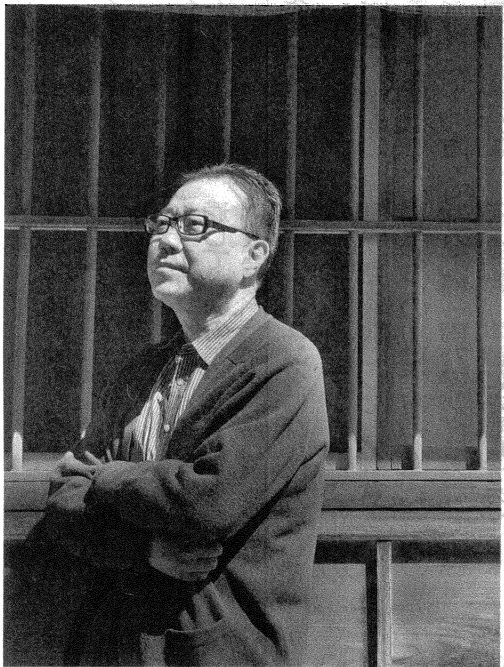
従来の医療では、医療を提供する側が一方的に情報提供し、患者や家族は「お任せします」という形でした。今はインターネットなどによって、さまざまな情報に接することができるようになり、双方向に近いやりとりが可能になりました。その情報の違いが、医療者と患者の「ずれ」を生む原因の一つになっています。さらに、大きな「ずれ」につながっているのが、患者としての経験がない医療者が、患者や家族の前で「分かったふり」

不信招く「分かったふり」

患者と医療者の「ずれ」実感

西村 元一
金沢赤十字病院副院長

ドクター元ちゃん
がんになる



—望月亮—撮影

をしていることではないか、と
思います。

私もがんと分かる前は、患者
としての経験がなく、患者の皆
問に対する回答以上の情報を得

ることはできませんでした。さ
らに、医療者側の興味は治療に
関することが中心ですが、患者
の皆さんは普段の生活について
も知りたいと考えています。そ
れに十分に気付けなかったこと
が「ずれ」を生んでいたと思いま
す。「ずれ」を少しでも小さくす
るため、互いを理解し合う、つ
まり対話する時間が必要だと考
えて努力したつもりでしたが、
それだけでは越えられない山が

あるような気もしていました。

自分自身が患者となってみる
と、手術後の痛みの状態や抗がん
剤治療の副作用など、一つ一
つが想像していたものとは異な
ってしまいました。例えば、「痛み
のひどさほどのくらい？」と聞
かれても、何と比較すればよい
か分かりません。抗がん剤の副
作用で起きる味覚障害も、口の中
が甘く感じたり、味覚全体が
落ちたりするなどパターンはさ
まざままで、事前に受けた説明だ
けでは想像できませんでした。

がんの告知を受けた後の精神
的な状況について、以前の私は
「単純に落ち込むものだろう」と
考えていましたが、実際は全
く違いました。本当に周りの色が
を失い、灰色だけの世界のように

見えることが分かったので
す。やはり「体験してみないと
分からない」と思いましたし、
患者が自分の心境を説明するこ
とも難しく感じました。

患者の思いを医療者が理解す
るにはどうすれば良いのでしょ
うか。少なくとも医療者は「分
かったふり」はやめなくては
なりません。「あなたの気持ちはよく
分かります」と言われると、逆
に患者には「本当に分かっている
のか？」と不信感のようなもの
が生じます。患者となった私
が医療者とやりとりした際、流
ちように説明されるよりも「そ
の気持ちまでは分かりました
が、その先はちょっと分かりま
せん」と正直に言ってもらった
方が安心できました。患者自身
も、元氣な医療者が患者の立場
を理解することは難しいという
ことが踏まえ、やりとりするこ
とが大切だと思います。

にしむら・げんいち 1958年金沢市生まれ。83年金沢大
医学部卒。金沢大病院などを経て、2008年金沢赤十字病
院第一外科部長、09年から現職を兼務。13年から、がん患者
や医療者が集うグループ「がんとむきあう会」代表。

次回6月12日掲載